

No.	提 案 名	提 案 団 体 名	
		代表者氏名	所 属
1	都市河川と建築空間の再構築による街なか活性化構想 ～宇都宮市釜川沿いの中心市街地を対象として～	宇都宮大学 安森亮雄研究室A	
		滝田 涼介	宇都宮大学大学院 工学研究科
		指導教員 氏 名	安森 亮雄

1. 背景と目的

宇都宮市中心市街地には釜川というこの地域の魅力となり得る資源があるにもかかわらず、その活用は不十分である。かつての宇都宮市街地には多くの小さな小川が流れており、宇都宮中心部を流れる釜川は戦前には清流を活かした染物屋や鰻屋などの飲食店があり、市民の憩いの場となっていたが、二層式河川に改修された後では昔のような光景は見られなくなってしまった。これは、中心市街地における賑わい欠如の大きな要因であると捉える。

また、中心市街地の商店街は、駐車場整備などのモータリゼーションへの対応や商業空間の魅力向上などの遅れにより、商業は停滞・衰退の方向にある。これに伴い、中心市街地で暮らすことのメリットであったはずの買い物の利便性や賑わいが大きく低下し、人口減少がおきてしまっている。

そこで、本提案では、宇都宮市中心市街地の大きな資源である釜川が媒介することにより、居住・商業空間を再構築し、住まいと商いにより中心市街地に賑わいをもたらすことを目標とする。そのために、現状から見えてくる住居系と商業系の混在のあり方、川と建築空間の関わり方の問題点を改善する提案を行う。

2. 宇都宮市中心市街地の現状

2-1. 中心市街地の衰退

①宇都宮市の郊外化

経済産業省の商業統計調査による小売業売場面積の推移（図1）を見ると、中心市街地における売場面積・シェア率が減少しているなかで、中心市街地以外では売場面積が年々増加している。これは、自動車を前提とした郊外型大規模商業店舗が増加しているためと考えられ、郊外が商業の重要な位置を占めるようになり宇都宮市の郊外化が進行していると言える。

②商業の衰退

宇都宮市の商店街通行実態調査による中心市街地の通行量の推移（図2）を見ると、中心市街地における平日歩行者通行量は昭和60年前後をピークに平成5年までは横ばいの状況が続いていたが、それ以降は減少幅が大きく、平成21年には6万人を割り込んでいる。休日歩行者通行量はピークである昭和60年の約20万人から、約6万人と約70%も落ち込んでいる。

また、まちづくり推進機構の調査である中心市街地における空き店舗の推移（図3）より、空き店舗数は100件前後で推移し、空き店舗が慢性的に存在している状況となっている。空き店舗の床面積を見てみると年々増加していることから、店舗面積の広い空き店舗が増えていることがわかる。

これらは、モータリゼーションへの対応や消費者の要望や多様な品揃えの遅れといった商業空間の魅力欠如によるものだと言える。

③居住の衰退

住民基本台帳をもとに作成された図4の宇都宮市の人口推移を見てみると、近年では一貫して微増傾向が続いており、平成11年に対して平成21年の人口は約2万人増加（旧宇都宮市）しているのに対して、中心市街地では平成11年から平成21年の間に約800人減少している。

これは、商業の衰退に伴い、中心市街地で暮らすことのメリットであったはずの買い物の利便性や賑わいが大きく低下したことにより生じたものと考えられる。

課題

買い物行動の変化により、中心市街地の商業・人口の空洞化を招いてしまっている。そこで、商業機能の再編、商業環境の改善が必要であり、中心市街地に住まう街なか居住とどのように関係を築いていくかが中心市街地活性化・再生の大きな課題となる。

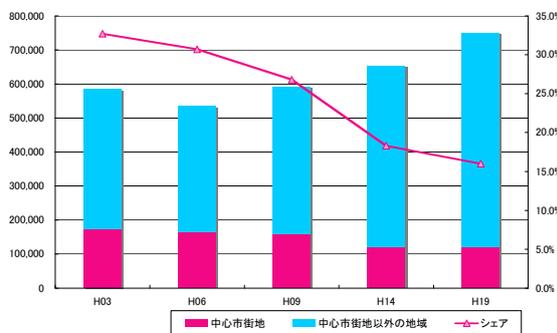


図1. 宇都宮市における小売業売場面積の推移

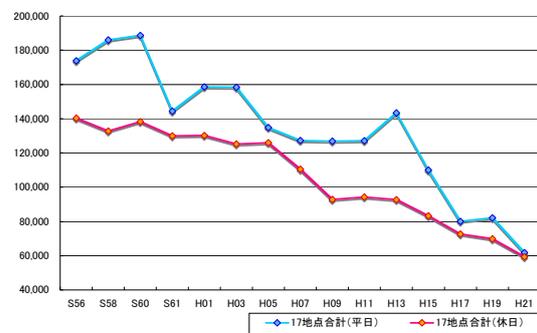


図2. 宇都宮市における通行量の推移

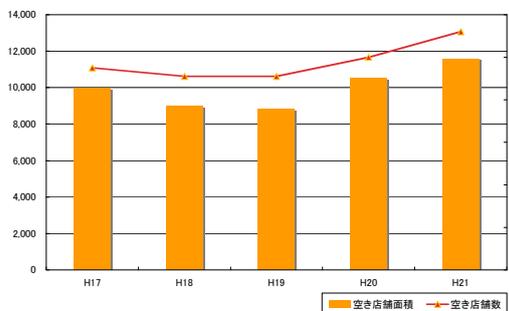


図3. 宇都宮市中心市街地における空き店舗の推移

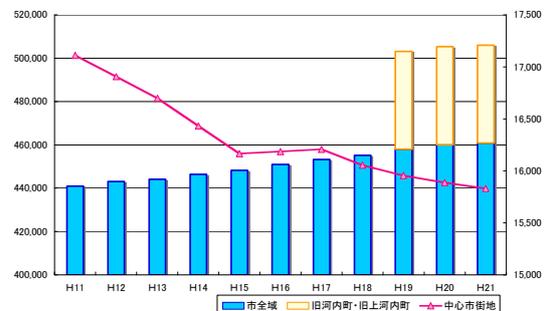


図4. 宇都宮市における人口推移

(出典：宇都宮市中心市街地活性化基本計画)

2-2. 住民意向

①中心市街地における住民意向

宇都宮市民を対象とする中心市街地活性化に対する意向調査（市による調査）をもとに中心市街地における居住の問題を中心にしてみる。

図5より、中心市街地に住みたいと思わない住民は7割以上と中心市街地での居住意向について低い結果となっている。しかし、図6の中心市街地に住んでいる人の居住継続意向を見てみると、7割近くの人が住み続けたいという結果になり、図7の居住年数別の意向についてみると居住年数に関係なくたいていの人が今後も住み続けたいという結果になり、中心市街地は住んでみると快適な居住環境ではあるがその魅力が伝わらないという中心市街地居住イメージの欠如が考えられる。

②中心市街地に求めること

市民が中心市街地に求めることとしては、図8より活性化が必要な地域としては、オリオン・ユニオン通り、大通り沿道を中心とする商店街の活性化が求められ、図9の快適な空間にする取り組みとしては、安心して歩ける、休憩施設やくつろげる空間づくりが求められ、釜川プロムナードを中心とした活性化が望まれていると考える。

一方、居住に関しては、図10より、生活利便施設の充実、閑静な居住環境を重視する結果となり、快適な空間にするための取り組みと居住における重視点との焦点に相違が見られ、川と居住空間という関係が考えられていないことがわかる。

課題

意向調査より、中心市街地居住イメージの欠如や快適な空間にするための取り組みと居住環境における重視点の相違など、中心市街地での豊かな居住スタイルのイメージが形成されていないことがわかる。そこで、街なか居住者の増加につながる明解な居住イメージを与えることが必要となる。

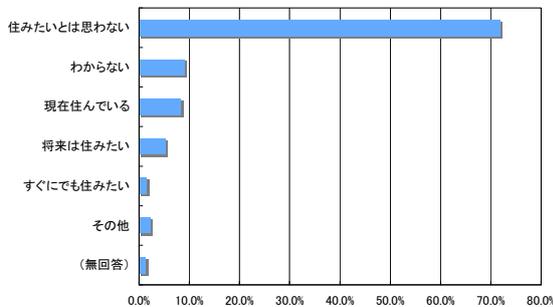


図5. 中心市街地における居住意向

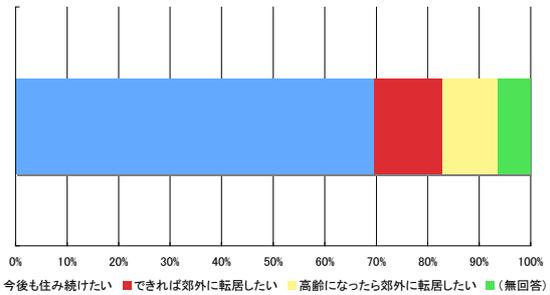


図6. 中心市街地に住んでいる人の居住継続意向

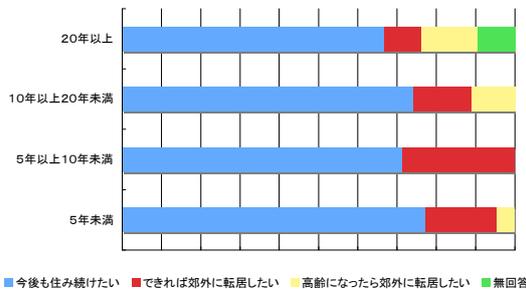


図7. 中心市街地に住んでいる人の居住継続意向
(居住年数別)

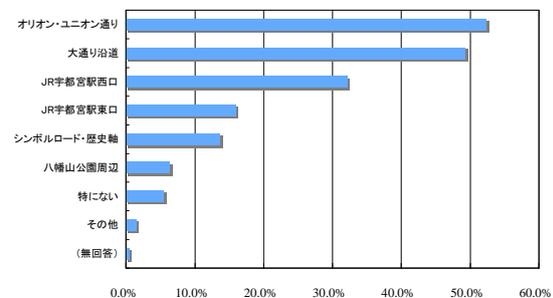


図8. 中心市街地で活性化が必要な地域

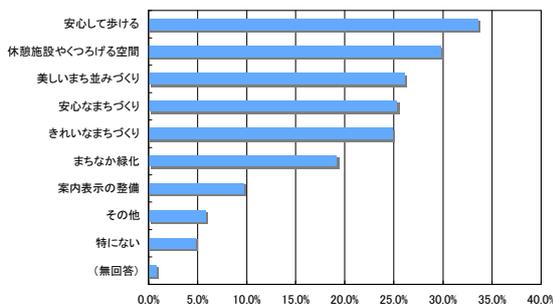


図9. 快適な空間にするために必要な取り組み

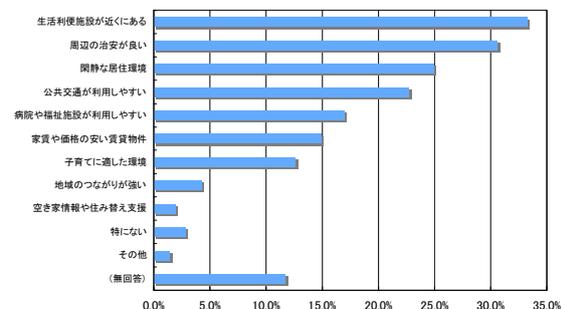


図10. 中心市街地での居住における重視点

〈出典：宇都宮市中心市街地活性化基本計画〉

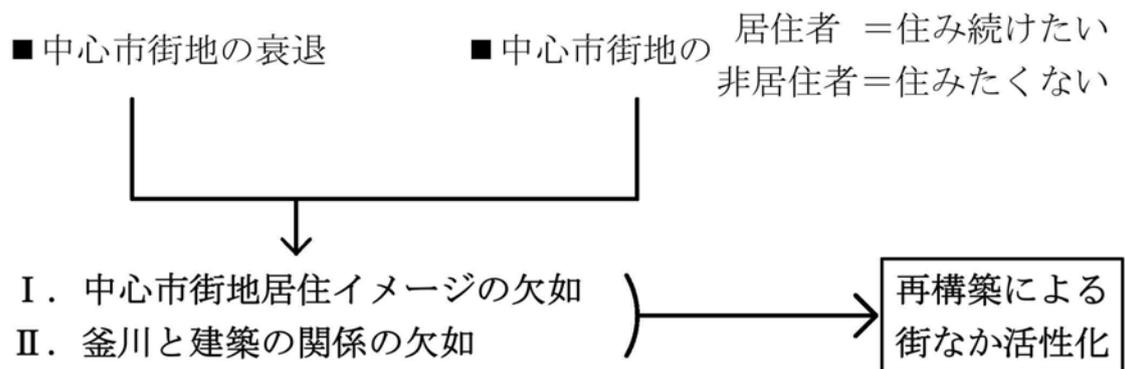


図 1 1. 宇都宮市中心市街地における課題の模式図

3 宇都宮市中心市街地釜川の空間構成

3-1. 川と建築とのインターフェイス

① 釜川の概要

栃木県宇都宮市野沢町の弁天沼に源を発し、宇都宮市街中心部を流れ宇都宮市天神で田川に合流する。下流部は宇都宮市街の都市部を流れる。

かつての宇都宮市街地には多くの小さな川が流れており、宇都宮中心部を流れる釜川は戦前には清流を生かした染め物屋や鰻屋などの飲食店があり、市民の憩いの場となっていた。戦後は流域の開発により水質が悪化し、たびたび氾濫を起こすようになったので、1989年に宇都宮都心部の下流、西田橋から今小路橋まで1.9kmが日本初の二層式河川（川底に排水路を設置している）に改修された。現在は並木や時計塔、東屋、ベンチをそなえた親水河川となっている。

② 釜川の現状

釜川プロムナードとして、楽しく歩くことができるよう休憩スペースが設けられていたり、木々の手入れがしっかりされ魅力的な親水空間になり得る可能性を持っているにも関わらず、それを活かした使われ方はされていない印象を受ける。

また、一部では川に対してエアコンの室外機が面しているなど川には建物の裏が面し、川と道路と建築との関係は一切考えられていない状態であり、それらを考えていく必要がある。



図 1 2. 釜川と東屋



図 1 3. 釜川に面する室外機

③ 釜川と道の関係

中心市街地を流れる釜川プロムナード沿いの川と道の関係の特徴として2つに分けられる。ひとつは、川に対して2本の道が接する場合、つまり川が道路に挟まれている関係であり、もうひとつは、川に対し1本の道が接する場合である。川に対し2本の道が接する場所は対象地域内のいたるところで見られ、川に対し1本の道が接する場所は局所的に見られ、これらはこの地域の大きな特徴であり、川と建築とのインターフェイスを考えるうえで重要なものとなる。

④ 川と建築とのインターフェイスの事例

・ 川床 (京都府)

京都を流れる鴨川では、川床と呼ばれる床が川の上に張り出したもので主に料理店やカフェなどのテラス席として利用され、川との距離によって川との関係性を保っている。

図14・15のスケッチと写真であらわされている川床では、川から高い位置に床が張り出され川を眺めることで涼しさや快適さを得ることができる。また、図16・17のスケッチと写真による川床では、川床の下には清流が流れ水を間近で感じることができる。

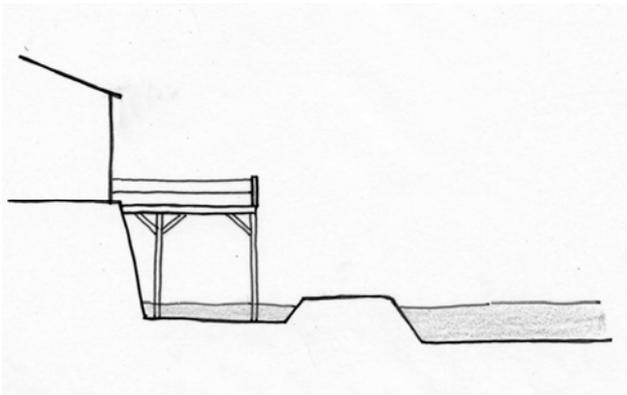


図14. 川を眺める川床



図15. 川沿いに続く川床

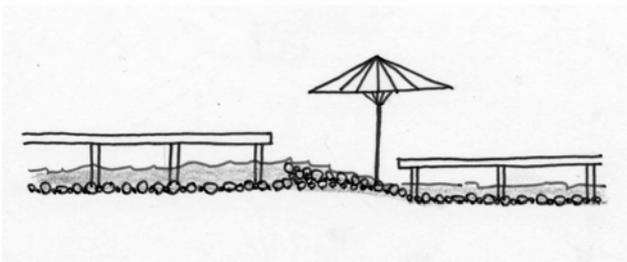


図16. 川との距離が近い川床



図17. 清流上の川

・ 川端（滋賀県）

滋賀県の針江という地域での川との関係である。図18～20で表すこのシステムは川端と言ひ、雪・雨が伏流水となり各家庭から非常にきれいな水がこんこんとわき出すので、人々はこの自噴する清らかな水を飲料や炊事といった日常生活に利用している。とても生活に密着した川と建築の関係である。

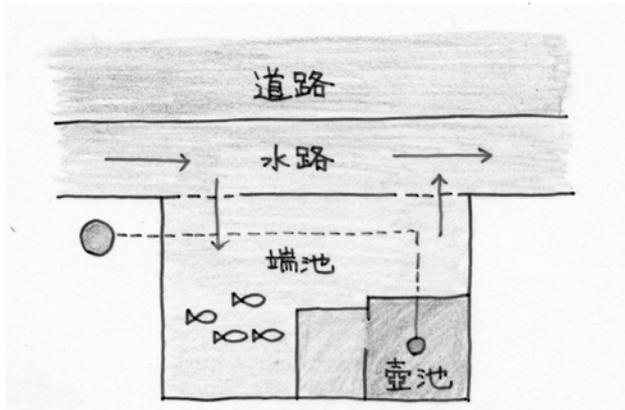


図18. 川端の平面構成

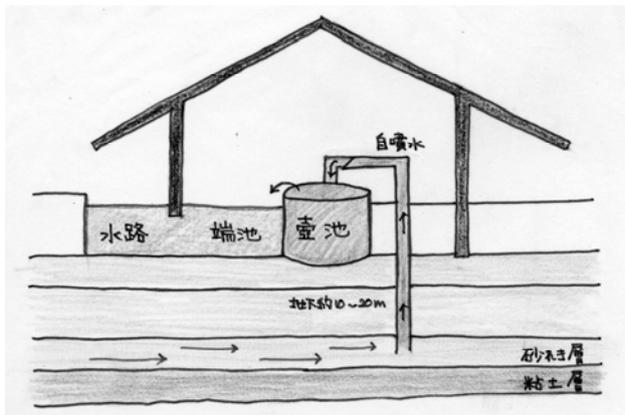


図19. 川端の断面構成



図20. 川端での生活

3-2. 川と都市構造

①対象地域概要

対象地域は宇都宮市本町交差点からオリオン通りを通り、今小路通りまで流れる釜川沿い約600mを対象地域とする。対象地域を①居住と商業の割合、②建物の階数の2つの指標によりエリア分け・分析を行った。

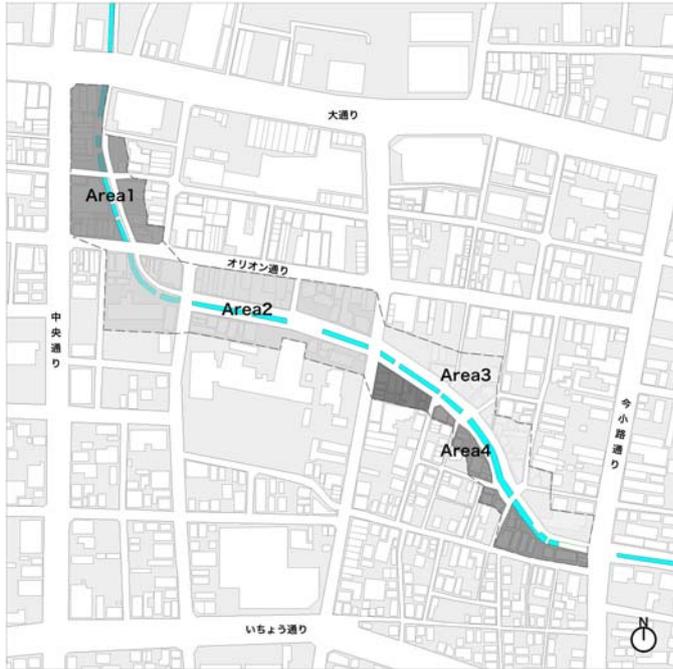


図 2 1. 対象敷地のエリア分け

Area 1 : ①居住 1 : 商業 9 の商業が中心の地域、② 2〜3 層の建物が多く大通りに行くにつれ高くなっていく

Area 2 : ①居住 7 : 商業 3 であるが高層マンションの影響であり、エリアとしては商業が中心、② 3〜4 層の建物

Area 3 : ①居住 3 : 商業 7 であるがエリアとしては居住が中心、② ほぼ 2 層と低層

Area 4 : ①居住 6 : 商業 4 で居住と商業が混合しているエリア、② 2〜3 層の建物が多い

②対象敷地の分析

図 2 2 は、各建物の一階の用途を住居系と商業系の割合で表したものである。Area 1 から Area 4 に向かうにつれ商業から居住にエリアの特性が移行していること見られる。

①住居系と商業系の地上面における建築面積の割合 (図 2 3) と②3階以上の建物の階数と用途 (図 2 4) の2つの観点でその特性を詳しく見てみる。地上面で見ると、商業系から住居系に移行していることがわかる。階層で見ると、平面で見られた、商業から居住への移行は見られず Area 2 で見られるような商業のエリアであるが居住のヴォリュームが飛び出していたり、Area 4 で見られるような居住エリアで商業のヴォリュームが飛び出ているなど、平面とは違い様々なヴォリュームが混在していることがわかる。



図 2 2. 対象地域における住居系と商業系の割合

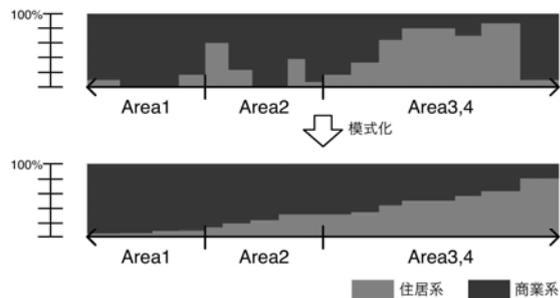


図 2 3. 地上面における建築面積の割合

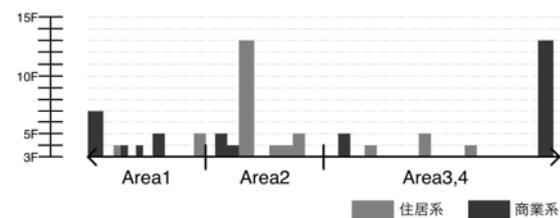


図 2 4. 3階以上の建物の階数と用途

③川と都市構造の事例

・ ヴェッキオ橋（フィレンツェ）

イタリアのフィレンツェを流れるアルノ川に架かる橋。イタリア語で「古い橋」の名が示すとおり、フィレンツェ最古の橋。河川の氾濫などで何度か建て直されており、現在の橋は1345年に再建されたもの。

ヴェッキオ橋には、16世紀頃から、橋上の両側に金銀細工店等の商店が並ぶようになり、大変栄えた。現在では、橋上だけでは足りずに橋からはみ出して増築されるまでになっている。両側にはぎっしりと商店が並び、橋上を歩いていても川の景色は見る事が出来ない。ただ橋の中央付近だけは開放されて、通行人の憩い場となっている。こうして橋としての機能だけでなく街道、あるいは市場、広場としての機能までも持ち合わせるようになった。



図25. ヴェッキオ橋



図26. ヴェッキオ橋上の商店街

4. プロジェクト

4-1. 川と建築のインターフェイスの提案

釜川を中心とした川と道と建築との関わり方、つまりインターフェイスでの提案が中心市街地居住の明解なイメージを与え、それにより街なか居住が促される。

釜川における川と道と建築とのインターフェイスの特徴を活かし、居住・商業空間での新たな関係とその明解なイメージを提案する。

① 商業空間と釜川

商業空間におけるインターフェイスの提案として、カフェのテラスから川や街並みが眺める川床が釜川に対し張出していたり、水を身近に感じることができるデッキが水面上に現れ、そこが商業空間の一部になりそこで自然を感じながら商いが行われる空間を提案する。

特に、川に対し1本の道が接する場所では、川に対する商業空間はより川との関係を積極的に取り込むことが可能であり、釜川との距離が生じてしまう2本の道が接する場所でも見ることや聞くことで川を意識できるような空間とすることができ、今までは考えられていなかった川と道と建築の関係を築き、魅力溢れる空間があらわれ、プロムナード沿いにおける商業を盛り上げるきっかけとなる。

② 居住空間と釜川

居住空間におけるインターフェイスの提案としては、街なか居住が促されるインパクトのある中心地ならではの豊かな生活のイメージを与えることが重要となる。

街なか居住の魅力とは、利便性や様々な人と交流することができることである。これらは、中心市街地で一般的に言われることであり、宇都宮市中心市街地にはこれらに加え、釜川との生活環境を考慮することにより、他の地域にはない魅力を生み出すことができる。

川の水を生活水に用いたり、川がもたらす清らかな風が自然のクーラーとなり、川と生活が密接な関係を結ぶこととなる。それにより、人々は川をきれいにすることや水を大切に使うことという1つの共通意識が生まれ、人々のつながりも生まれる。

郊外にはない快適で賑わいのある暮らしと人と人との暖かいつながりにより街なか居住のイメージも大きく変わるであろう。

4-2. 川と都市構造の提案

釜川沿い約600mの対象地域に沿って建つ帯状の『集合住宅と商業店舗の複合施設』を提案する。この建築が存在することにより都市を快適な環境に保ち、また、釜川プロムナードを中心とするこの地域の居住と商業の関係を再構築することにより賑わいの中心軸を創出させる。

① 環境システムの提案

帯状に建つこの建築は一見川沿いに大きな壁をつくってしまっていると感じるが、建物には様々なヴォイド（隙間、穴）が存在し、釜川の川上から川下に向けて吹く風を中心市街地に送る環境装置となる。

街には心地よい風が吹き流れ、中心市街地全体が環境の良い都市空間となる。

② 賑わいの中心軸の提案

釜川プロムナードを挟んで帯状の建築を提案するにあたり、今までほとんど人通りがなく遊歩道として活用されていなかったプロムナードに賑わいをもたらす提案とする。そのために、現在ある歩行空間・憩い空間のほかに市場（商業）や生活（居住）の機能をプロムナード上にもたらすことにより、生活圏を結びつける重要な軸となる。

③ 居住と商業の混在のあり方の提案

『3-2. 川と都市構造』において対象地域の現在の住居系と商業系の混在具合を明らかにした。Area 1からArea 3、4にかけて商業から居住への移行が見られる。この特徴を維持したまま、居住と商業の部分的な関わり合い方を考慮しながら全体を構成していく。

現在の問題として、人通りの多い道に接する部分には商業が、その上の層の道から離れた部分にはプライバシーの問題から居住が存在し、それらの関わりが感じられない。そこで、人通りが多い低層部にも居住空間を、上層にも商業空間が混在できる手法を提案し、居住と商業の新たな混在の手法を見出し賑わいを創出させる。

【参考文献】

- ・ 宇都宮市中心市街地活性化基本計画
- ・ 宇都宮市建物用途別現況図
- ・ 宇都宮市民を対象とする中心市街地活性化に対する意向調査
- ・ 川床・納涼床-京都の夏の風物詩〜貴船・鴨川・高雄〜京都おこしやす.com
<http://www.kyoto-okoshiyasu.com/see/kawadoko/>
- ・ 針江生水の里委員会
<http://www.geocities.jp/syouzu2007/>
- ・ イタリアの橋散歩 フィレンツェ (FIRENZE) No.2
<http://www.civilnet.or.jp/gallery/ebridge/Firenze/02VECCHIO.htm>